

## 東京大空襲の記憶

佐藤昌男

昭和20年3月10日は陸軍記念日で、米国の報復攻撃があるのではないかとのうわさが流れていた。3月9日昼過ぎから北西の風が強く吹いていた。防火用水には厚い氷が張っていた。はたして9日夜10時30分警戒警報のサイレンが鳴った。房総半島から入ったB29は2機で、高度で何度か旋回し海上に飛び去った。完全な偵察飛行だったが、後続主力部隊への無線誘導機だった。(ということに後で判明した。)

それから約2時間後、空襲警報も出ぬうちに異様な炸裂音とともに空襲が始まり、あちこちで火炎が吹きあがった。こうして東京大空襲は真夜中、午前零時時8分ごろ、北西の強風が吹きすさぶ中で始まった。米国の戦略爆撃機B29、279機(サイパン島を飛び立った機数は320機と言われている)が来襲し、まず東京の爆撃目標地点(浅草、日本橋、本所、深川)に「焼夷弾」によるピンポイント爆撃を行い、続いて目標地域内に無差別、じゅうたん爆撃を始めた。しかも比較的低い高度での飛行だった。

我が家は本所区横川橋4丁目(現墨田区横川)で両親と子供5人の7人家族だった。父は近くの精工舎で働いており、長女(当時17歳 女学生)が郊外の軍需工場で働かされており、家には母と次女(15歳)、三女(12歳)、長男(8歳)と次男(=私4歳4カ月)の5人が住んでいた。但し三女と長男は山形県酒田市の親戚の家に縁故疎開し、学期末で数日前に帰宅したばかりだった。

突然の大空襲で東京下町は大量の焼夷弾による火の海となり人々は逃げ惑った。当初は当局からの指令通り、消火活動を続けていた母親も、北の大火災から避難してくる人波を見て逃げ出すことを決めた。(防空法では空襲下でも消火活動が最優先だった。)道路わきの小さな「防空壕」に隠れていた私を連れ出し、玄関のタタキ(三和土:赤土・砂・消石灰等に水を加えて固めた土間)を掘下げた地下物置の上に蓋をして土をかけ、防空頭巾と布団をかぶり、逃げる人でごったがえし、炎と煙が渦巻いている道路を這うようにして南に歩き始めた。次女は私を背中におんぶし、その上からねんねこ(綿入れ)で覆い、三女、長男と共に母親の後を追うように逃げ始めた。炎や煙に巻かれ思うように進めず、大きな道路(蔵前通り)に出る前の小さな四つ角で、火炎と煙が渦巻き母親を見失った。人々が逃げ惑う中で子供たちが必死に大声で母親を呼び、母親が煙の中からあらわれたときはホッとしました。

避難する人々は大通りに着いたとき、赤々と燃え上がる家やビル炎を見て立ちすくんだ。たくさん火のついた木の枝や紙類が強風の中で巻きあげられてい

た。その後私たちは大通りを渡ることを決めたが、父の働いていた「精工舎」や他の家々から炎が噴きでており、火の粉はもちろん、燃えた柱などが強い風に巻き上げられている状態だった。頭巾から出ていた髪の毛、眉毛が焦げる中、ようやく「錦糸公園」裏口（北東角）にたどりついた。かなりの人が逃げ込んでおり、屋根のあるコンクリート製のコロネード（古代ローマ風の列柱）の下には人がいっぱいに入れなかった。やむなくコロネードの前にある四角いプール状の噴水池の縁石の横に陣取り、わずかに残っていた水に持ち歩いてきた布団を浸し、それをかぶって火の粉を防いだ。

周囲は火の粉、煙で大混乱に陥り、頭、顔が焼けただけの人、寝巻が燃えた人、煙を吸って死んだ人が倒れていた。その間も人々は公園の周囲の木々に燃え広がらないように必死で消していた。私も防空頭巾、布団に落ちてきた火の粉見つけた時は姉たちに教えて消したりしていた。当時、公園内には兵隊も居たし、馬も飼われていたが、その馬が多くの人、炎、煙におびえて暴れ出し、兵士たちが抑えるのが大変だった。

この日は北西の風の為、火は北西から押し寄せ、人々は南に逃げ出したが、西の隅田川方面に逃げるか、東の十間川を渡り亀戸方面に逃げるか、南の錦糸公園あるいは総武線のガード下まで逃げるかで運命が分かれた。逃げ迷った人は途中で猛火に巻かれて焼死し、水辺にたどりついて次々と飛び込んでくる人々の下敷きとなり溺死した。学校などコンクリートの建物に逃げ込んだ人々も、校舎の窓が炎と熱風の為に破壊され焼死した。コンクリート製の防空壕に逃げ込んだ人も、周囲が焼けたため酸欠状態となったり、蒸し焼きとなり死亡した。

錦糸公園が避難場所として最適だったのは、公園周囲の常緑樹が防火林の役目を果たしたこと、北側が蔵前通り、西側が四つ目通り、南側が総武線のガードまたは土手、東側に十間川があり、周囲からの類焼をある程度遮られたことがあげられる。誰もがあのようなところで助かるとは思わず死を覚悟したことだろう。私たちは非常に幸運だった。私たちの選択が生死を分けたのだ。

ところで錦糸公園北隣の精工舎にいた父はどうしたのか？ 父は空襲の始まった真夜中に精工舎3階の職場で働いていたが、空襲が始まり周囲が燃えてきた段階で、暗幕カーテンを引きちぎり、水に浸してかぶり、一階まで逃げてきた。建物の外に出たが、夜食に出た握り飯の残りが地下食堂に残っていたことを思い出し、食堂に戻って握り飯を布に包み外に飛び出し、工場敷地にあった下水管の中に潜んでいたという。家族が隣の錦糸公園にいることを全く知らなかったようだ。

空襲が終わった朝、公園を出てから家に戻るまでの光景は忘れられない。コ

ンクリートの建物以外はすべて焼き尽くされ、異臭が立ち込め、アスファルトの道路は熱でふにゃふにゃであり、道路のいたるところに焼死体が転がっていた。或る者はトタンの下から焼けた手足が出ており、あるいは炭のように転がっており、または蠟人形のように横たわっていた。これ以上に悲惨な状況はそれ以来見た事が無い。

我が家の場所もわからなかった。電柱はくすぶっており、見渡すかぎり焼け野原となった街で、かろうじて我が家の前にあったコンクリート製の防火用水槽を見つけ、我が家の焼け跡が確認された。周辺で残っていたのは三女及び兄が通っていた「柳島国民学校」であり、生き残った人たちと一緒に学校へ行ったものの、そこは焼死体の収容所でもあった。廊下にも白い布をかぶせられ焼死体がたくさん並べられていた。思わず休んだ下に死体があったこともあった。しばらく教室で休んでいると、家族を捜しに来た父と出会えたのだが、家族全員が無事だったのは奇跡だった。父が持ち込んできた夜食用の握り飯は、唯一の食べ物であり、周囲の人と分け合って食べ、大いに感謝された。その後兵隊の一団が現れ、新聞紙の紙袋に入った「乾パン」を配り始めた。罹災者が貰った食料はこれだけだった。この学校での生活も長くは続かなかった。

翌日の午後、堀切の小父さんの町工場に出かけた父は、夕方、小父さんと一緒にオート3輪車で家族を迎えにきた。堀切地区は今回の空襲では被害が少なかった地域だった。焼け跡の玄関タタキ下の地下倉庫（当初は防空壕として利用した）から、焼け残った長びつ、行李、茶箱、文机等をオート3輪にのせ、家族も一緒に乗って新宿の知人の家に一時避難した。しかし東京では空襲が続いており、3月末には知人の親戚のお世話で栃木県那須烏山の炭焼き小屋に、そして6月中旬には両親の出身地でもある山形県飽海郡南遊佐村千代田（現酒田市千代田）に疎開し、「馬小屋」を改造した家に落ち着くこととなった。3月10日以来ようやく家族が安心して暮らせる所に落ち着いたのだ。東京で叔父宅に身を寄せていた長女と父も戻ってきたが、父は堀切の小父さんの仕事を手伝いに東京に戻った。その後、家が手狭と言う事で、同じ敷地の「蔵」を改造した家に住むことになった。いずれの家にも井戸は無く、近くの親戚の外井戸まで水汲みに行くのは大変だった。

1945年8月15日（東京大空襲から約5ヶ月後）は快晴で真夏の太陽が照りつけていた。大事なラジオ放送があるということで親戚の中庭に行った。やがて天皇陛下の声が流れてきたが、何を言っているのか分からなかった。後で日本が戦争に負けたことを母親から聞いたが、子供には理解できないことだった。しかし、それは戦後の厳しい生活のはじまりだった。